

---

# ヘタ鬼 Another storys

宮原 司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘタ鬼 Another storys

### 【Nコード】

N1596Z

### 【作者名】

宮原 司

### 【あらすじ】

始めはただの噂話だった。

世界会議場から三時間程歩いた所にその屋敷あった。  
そこには化け物が出ると言う噂があった。  
入ったら出会う灰色の化け物。  
追いかける国達。

それは、一種の鬼ごっこのようなものだった。

逃げるのは国。追うのは鬼。

さあ、命懸けの鬼ごっこを始めようか。

の様に書いてますがシリアスは、笑いはと表記。  
ホント、ごちゃまぜですよ。

## 01：始まりはここからだ　　（前書き）

初めに

これはヘタ鬼の小説です。

思いつきり模造が入ってます。

そして作者のアレンジが入ってます。

台詞も変わってる所があります（まだ一度しか見てないのでお許しを）。

結構残酷表現があります。

残念クオリティー。

つまりは駄文です。

それでも良い方は　にスクロールして下さい。

## 01：始まりはここからだった

本当に。本当にそんなつもりじゃなかったんだ。ただ皆でわいわいやろう、仲良くなろうと思っただけ。楽しく皆で騒ごうとそんな軽い気持ちでアメリカに話した……。なのに。なのにこんな事になるなんて……。

《初めてこの屋敷に入った時の事は息も出来ないくらい、鮮明に覚えていて》

屋敷に入っすぐ現れた謎の灰色の化物<sup>おに</sup>。何故屋敷にこんな物がいるのか、そんな事を考える間もなかった。一番後ろにいた中国が扉を開けようとしたが扉は無慈悲にも開かない。それが分かった瞬間、皆化物の攻撃を躲<sup>かわ</sup>しながらバラバラの方向に逃げた。誰が何処へ逃げたかは覚えていない。ただただ化物は刻一刻と俺に近づいて来る。このままじゃ、逃げ切れない。俺も自慢して言い訳じゃない逃げ足で逃げ切る事に成功した、そう思っていた。まさか、まさかそれが俺を逃がす為に化物の間に入った日本のお蔭だ何て、俺は知るはずもなかった。

俺が咄嗟に逃げ込んだのは暖炉のある鍵つきの部屋だった。暖炉に火はなく、肌に触れる部屋の空気はひんやりと冷たい。何となく鍵をかけいい後ろが恐くなり、鍵を閉める。扉を叩いたのがもし一緒に来たメンバーであれば何かしら声をあげる筈だ。しばらくその部屋で待った。でも……、誰の声もしない。恐る恐る部屋の鍵を開ける。確か逃げ込んだ時にドイツが入った部屋を目指す。それは階段から出て左手にある扉。ゴクリと唾を飲み、ドアノブに手をかける。そして周りを見回すと一気に扉を開ける。そこには……、

「ドイツ、プロイセン！」

見知った二人の青年が息を整えていた。二人共あの化物から逃げ切ったそう時間は経っていないらしい。扉を後ろ手で閉めると息を整える二人の側に座った。

「……二人共、あの化物、見たよね？」

「あ、ああ……」

まだ二人共顔色は青かった。イタリアだってあんな生き物は生まれて始めて見る。そして……、恐かった。年の功なのだろうか、プロイセンが先に息を整えて持っていた剣を軽く手入れする。

「ヴェスト。敵が何時来てもいいようにお前も準備しとけ」

無言で頷くドイツも愛用の使い込まれた鞭を磨く。自分はどうしよう。持っているのは常に白旗と小型の救急箱持ち運んでいるだけだ。これだけではあの化物が襲って来ても闘い様がない。事実、イタリアの使える術技は補助や回復に限られていたのだから。見れば二人共傷は小さいが怪我をしていた。一瞬自分の白旗を見つめて、布を一思いに引きちぎる。

「イ、イタリアちゃん!？」

「イタリア!？」

二人の驚きの声があがるが、有無を言わずにドイツとプロイセンの怪我の部分に丁寧に巻いていく。自分に出来る事はほとんど無いに等しいのだから。その時だった。ガチャガチャとドアノブが激しい音をたてて回った。プロイセンとドイツが揃って目でイタリアに合図する。合図を受け取ったイタリアも二人の邪魔にならない程度に後ろに下がる。剣と鞭を構える二人。そして扉が開くと……、

「何だ君達、ここに居たのかい!？」

声の主はアメリカだった。彼の後ろから中国、イギリス、フランス、ロシア、カナダが部屋へと入って来る。皆一様に怪我をしているが、誰一人として重症の者は居なかった。

「お前らも無事だったか……」

ほっと一息ついて剣を下ろすプロイセン。だがその目は油断なく今は閉ざされた扉を見ていた。

「何とか、ね……。ってイタリアも無事だったか」

良かった良かった、とグシャグシャに頭を撫でるフランス。彼もまたあの灰色の化物と戦ったのだろっか、二の腕を包む服にうっすら血が滲んでいた。

「フランス兄ちゃん。よかったら俺、腕、手当てするよ?」

頭をよしよしと撫でていた手が不自然に一瞬止まった。が、

「なあに。お兄さんはまだまだ大丈夫よ。それより自称紳士とカナダを手当てしてやってくれる?」

「自称言っな!!」

フランスの発言にキレたイギリスを避けて先にカナダの手当てをする。

「す、すみません……」

確かにフランスの言う通り二人の怪我は皆より酷かった。カナダの手当てが終わり、恐る恐るイギリスに近づく。すると、

「……そんなにびくびくしなくても俺は何もしねえよ」

不機嫌そうに言われた。別にイギリスに怯えていたのではない。正確にはその怪我の酷さに、だ。

「ったく……。どっかの誰かさんを庇うんじゃないぜ」

小声で愚痴を言う。そして、誰にも言うなよ?と釘をさされた。捲



つて出された足は少しえぐれていた。あの化物にこれで済んだのなら良かった方なのかもしれない。びりびりと破いた白旗の布を器用に足に巻いて、術で止血する。これで全員の怪我の手当ては修了した。

「ねえ、これから僕らどうしようか」

ポツリとロシアの呟いた言葉が部屋中に響く。皆交代で扉の見張りをしているがまだ気は抜けなかった。

「……やっぱりさ、何人かに別れて屋敷を探索しよう」

そうアメリカが言った。だがそれはいい案であると同時に危険な賭けでもあった。別れてしまえば必然的に襲われる危険は高まるからだ。すると、ずっと黙っていた中国が、

「<sup>アメリカ</sup>美国にしては珍しく正論言ったある。確かにここに何時までも居ても何の解決にもならねえある」

真っ先に賛成する中国。次々と賛同していく皆。普段なら反対するフランスでさえ、

「ホント、こればかりは仕方ないねえ……」

ぶつぶつ言いながらもズボンの埃を払い、立ち上がる。

「イタリアは……、どうする？」

俺達が無処か安全な部屋を見つけるからそこで待つてるかい？、遠慮がちなアメリカの声。それはきっと自分が恐がりで戦う手段を持たないからだろう。それでも、それでも答えは決まっている。

「俺も手伝うよ」

責任は始めに誘った俺にあるのだから。

一階にはまだあの化物が居る可能性がある。二階の部屋はほとんどアメリカ達が調べたらしい。残るは上の階だけ。イタリアが少しだけ扉を開いて確認するが廊下には人一人いない。皆警戒を怠らずにそろりと廊下に出て、すぐ側にある階段を昇る。ここでメンバーは別れる事にした。上に続く階をアメリカ、カナダ、中国、イギリスが。三階をドイツ、プロイセン、ロシア、フランス、イタリア。三階の二つの部屋の内、出前のドアノブに手をかけたその時だった。ガチャガチャとけたたましい音をたてながら奥の扉が開く。そこに居たのは、見たくなかった灰色の化物。その瞬間、ドイツの顔が強張る。そして、

「イタリア！お前はそこの部屋を調べろ！それまでに俺達はコイツ

を倒しておく！」

ドイツが鞭を構え、プロイセンが下段に剣を下げる。ロシアが怪しげな水道管を持ち、フランスが不得手なレイピアの柄に手をかける。

「V a b e n e ! !」

思いきつて扉を開けて中に入る。すると、戦時中に嫌と言う程嗅いだあの鉄の様な臭いがした。嫌だ、これ以上先には行きたくない。でも誰かが怪我をしているならば手当てをしないと……。葛藤を乗り越えて部屋の奥へ踏み出したイタリアが見たのは……、

「日本？」

血まみれでピアノに寄りかかる日本の姿だった。

突然目の前にぶちまけられた光景に俺は目を疑った。が、遠くからでも分かるくらいぐっしょりと血で濡れた日本の黒い髪。真っ白な軍服は真っ赤に染まり、彼が寄りかかっているピアノも赤一色で染め上げられていた。真っ白だったであろう床には、大きな血だまりが出来ている。傷は酷く、息は浅い。

「ホントに、日本なの？」

日本が居る……。そうだ、俺達は10人でこの屋敷に来たんだ。何故。何故忘れていたのだろう。俺は思考が徐々に戻って来たのを感じ、そして、

「日本！」

ここでもようやくこれが現実である事を理解した。駆け寄って流れ出る血を止めようと傷口を手で塞ぐが血は一向に止まる勢いを見せない。俺が体に触れた事に気づいたのだろうか。日本がゆっくりと顔を上げた。

「無事で良かった、イタリア君。こんな爺でも罔になれて良かったです……」

大量の血を失い、土気色になった顔で優しく微笑する日本に一瞬俺の頭は何を言われたか理解する事が出来なかった。今日本は何て言った？罔？もしかして、あの時俺が化物から逃げ切れたのは……、日本が罔として惹き付けてくれたから？それを全て理解した瞬間、叫びたくなった。

「どうやら私は、ここまでの様です……」

日本と最後に何を話したかは鮮明に覚えている。だけれども、未だにイタリアは信じられなかった。国である筈の日本が死んだ何て。

力なく床に落ちた手には彼の愛用した刀が握られていた。彼の最後の言葉は何だったろうか。確か、

『最後までご一緒出来なくて、本当にすみません』

途中まで言いかけて最後は口の形だけで伝えてくれた。イタリアがなけなしの治療道具で手当てをしようとしたら、私より他の方に使って欲しい、と。土気色の顔をした彼の何処にあれだけの力があつたのだろうか。彼は自分が死ぬまでその手を離さなかった。まるで、自分が死ぬ事を悟っていたかのように。

「日本……」

日本が死んだ、そう肌で感じてしまった瞬間に涙は止まってしまった。俺は悲しくて、悲しくて仕方がないと言うのに。涙は出なかった。そして、

「じゃあね、日本」

手についた日本の血を拭い、足取りの重い中、ゆっくりと廊下へと続く扉を開けた。

《ひとり、またひとりと》

暖炉のある鍵つきの部屋。そのカーペットの上にロシア、フランス、中国の三人が横たえられている。まだ意識ははっきりしているが何処まで持つかはイタリアには分からなかった。

「おらイタリア。行け。ここに居たら、また化物が出るぞ」

息も絶え絶えなのに明るく言ってみせるフランス。先程までは元気にイギリスと冗談を言っていたのに。だが今は力なく体を床に横たえて話すだけでも辛そうだった。日本が欠けてから情報を出し会う為に集まり、地下室の鍵と書斎の鍵を見つける事に成功した。二つの部屋を見る為にまた二手に別れたのだ。イタリアはロシア、フランス、中国の三人と書斎に行き、あの化物と出くわした。先程戦ったよりも化物は強く、素早い。フランス、イタリアの術もむなしく、前衛二人はぼろぼろだった。そこに偶々地下室の状況を伝えるに來たプロイセンが入り、闘いは一旦こちらが有利になった様に見えた。だが、化物の急に早く、鋭くなった一撃を喰らったロシアは動けなくなり、中国もそれに巻き込まれて戦闘不能。最終的には三人（イタリアは補助）で何とか化物を倒しきったのだ。が、フランスまで重症を負った。何とかアメリカ達が来る前にと暖炉のある鍵つきの部屋に運んで今に至る。

「プロイセン……。イタリアの事、任せたぜ？」

「……ああ」

絞り出す様に声を出していたフランスがふっと泣きじゃくるイタリアに笑って見せる。そして、

『最後まで一緒に行けなくてごめんな、イタリア。お前は頑張れよ？』

そつ口が動き、深く息を吐いた。

「兄ちゃん？」

彼は、二度と返事を返してくれなかった。

「伊太利。<sup>イタリア</sup> お前も早く行くよろし。お前がここに居たって何の意味もないある」

中国もイタリアの術でも癒しきれない程の切り傷を負っているのにそんな事を言う。

「ホントに、君はとろくさいね。……僕達の頑張り、ムダにしないですよ？」

一見悪口を言っている様にも聞こえるが、これは不器用な二人の精一杯の激励。ずっと黙っていたプロイセンが行くぞ、と肩を叩いた。プロイセンに続いてイタリアも扉の所まで行く。閉めるの直前に二人を見ると、

『最後まで一緒に行けなくてすまねえある（ごめんね？）』

そつ口が動いたのをイタリアは見た。名残惜しげに閉めた扉の奥が沈黙に満たされたのはそれから数分後になる。

《命を落としていったんだ》

「……うん。だから君は先に行っていいんだぞ」

必ず追い付くからと言うアメリカの体には袈裟懸けの裂傷が。彼が寄りかかるベットにはイギリス、一つ向こう側にはカナダが横たわっていた。二人とも、ついさっきの襲われた化物との戦闘で命を落としたばかり。化物の振り返りざまの攻撃を避ける事が出来なかったイタリアを庇ってアメリカまで動けなくなった。たぶんここから動かせばアメリカの命をもっと早く縮める事になる。だからイタリアは彼をここからドイツの居る部屋に連れて行く事が出来なかった。

「何で、何で庇ったの？そのせいでアメリカが……」

ぼろぼろと涙が流れる。

「確かに俺はさっきの攻撃で動けなくなつたさ。だから……、ここに残るよ」

「そんな……」

「いや、違うな。彼らにはもう聞こえないから言っけど……、俺が側に居たいんだ」



アメリカはベットに横たわる二人を普段なら見る事の出来ないくらい優しい目で見ていた。そうだ。確か二人はアメリカの……、

「大事なんだよ、二人とも」

大事な家族なんだ。どんなに納得出来なくても、それならばイタリ  
アに彼を引き止める事は出来ないだろう。

「だから居たいんだ。俺の最後まで」

「……アメリカ」

『最後まで一緒に行けないけど、ここから幸運を祈ってるよ。あの  
二人だって死に際にそう言ってた』

《俺は、何の役にもたたなくて……。馬鹿みたいに皆に守ってもら  
ってた》

ようやく部屋に戻って来た二人を見て、自らの犯した罪の大きさに  
イタリアは泣き叫んだ。

「どうして……。少し様子を見てくるだけって言ったのに!!」

支えあいながら血まみれの二人が力なく床に座り込む。

「それは、お前が皆が死んだ事を黙っていた事と同じだ」

「!?!?どうしてそれを……」

二人は皆が死んだ事をつくに気づいていたのだ。そして、こんなにぼろぼろなのに、イタリアを見て笑う。それを見るのが、辛かった。

「ほら、入口の鍵だ。これで出られるぞ」

喜べと血にまみれた鍵をイタリアの手の中に落とす。真鍮で作られた鍵は二人の血を被っても鈍く光続けていた。

「そうだぜ、イタリアちゃん……」

折れて辛い筈の腕でイタリアの頭を撫でるプロイセン。違う。違うよ。俺、本当は二人が化物に奪われた鍵を取りに行ったんじゃないかって途中で気づいてた。なのに、

「俺達はここで少し休んでから行く。だからお前は先に行け」

もう我慢出来なかった。これ以上皆を犠牲にして生き残る何て俺に出来る筈もない。

「やだ！俺もここに残る！ドイツ達をここに置いていける筈ないよ！！」

どんなに怒鳴られても、殴られても、訓練が厳しくても、それでもいいから。俺は二人と居たかった。

「言う事を……聞かない……奴はグランド10周……だな」

「ほら、イタリアちゃん。早くしないと……もっと増えるぜ?」

優しく、同時に残酷な事を言う二人。

「良いよ。俺、何周でも、何百周でも走るよ!だから……」

一緒に……、そこまでいいかけた時、パタンとプロイセンの腕が床に落ちた。

「プロイセン?」

続いてドイツも。

「ドイツ?」

二人は俺のせいで死んだと言うのに、日本と同じ様に、皆と同じ様に笑っていた。皆、皆、俺のせいで死んでしまった……。

どれくらいドイツ達を見つめていただろうか。跳んだ思考が徐々に戻ると同時にどう表していいか分からない感情が生まれる。現実を

受け止める、頭がそう命令しても感情が追いつかない。のろのろと顔を上げた先にタンスが見えた。とにかく皆が死んだ事が信じられなくて、それを当てる様にタンスを壊す。下の階に降りる度に目についた物を壊していく。そして、台所に来た。坦々とまた壊す作業をしようとして近くにあった皿を床に投げつける。その時、欠片が当たったのだろうか。指先が少し切れていた。傷口から血が少しだけ盛り上がる。

「……痛いよ、ドイツ、日本」

これが何時もだったら、

『全く……。鍛え方が足りんぞ、イタリアー!!』

『ドイツさん、それは少し違うと思いますよ。ああ、ほらほらイタリア君泣かないで下さい。今絆創膏を出しますね』

何気なく心配してくれたのだ。アメリカ達だったら、

『全く、君はドジだなあ……』

『アメリカ君が言える事じゃないかな』

まずアメリカとロシアはバチバチと火花を散らし始めるだろう。

『何やってるあるかお前は……。有難い薬塗ってやるから手を出すよろし』

『ホントねえ……。イタリア、次は気を付けるんだよ?』

中国がぶつぶつと言いながら薬を塗って手当てしてくれて、フラン  
スが釘をさす様に注意する。

『ワイン髭に言われたら終わりだな』

『何だって！良いの？お兄さん、本気だしちゃうよ！？』

『二人共止めて下さいよー！！』

喧嘩をする二人の間にカナダが入るのだ。全部失われた。あの灰色  
の化物によつて。ふらふらと当てもなく階段を昇り、適当な部屋に  
入る。そこは……、図書館だった。どうせ見たつて頭に入る筈がな  
いのに適当な本に手を伸ばす。名前は『竜頭の孤』。何だろつと開  
こうとしたその時だった。ボタンツと扉の開く音がしてあの灰色の  
化物が部屋に入つて来た。

「う……、うわあっ！！」

恐怖からか足が勝手に出口へと動き出す。とにかくあの化物から逃  
げないと……。その一心で足を動かす。階段へとたどり着き、急い  
で駆け降りる。そして開く筈のない扉まで必死に走り、そのドアノ  
ブを捻る。ドイツから貰った鍵が胸ポケットの中から消えると同時  
に、入った当時は固く閉ざされていた扉が開いた。

吹き荒れる風とその風に乗り、叩きつける様に降る雨。薄暗く、辺

りを見渡せば屋敷の門が見えた。

「出られた……？」

あれだけ固く閉ざされていた扉が開いた何て信じられなかった。1、2歩歩き出して屋敷を振り返る。そこにはこの屋敷に来た時と変わらない姿が。ただ一つ違うのはこの屋敷と一緒に眺めた仲間がいない事。

「何だよ……。皆を、皆を屋敷に置いて、行ける筈がないじゃないか」

抱えたままだった本を強く握り、再びドアノブに手を掛けようとす。それと同時にガチャガチャ！、ドアノブが一回転。もう1、2歩下がったイタリアの前に現れたのはわざわざ外まで追って来たのだろうか。灰色の化物が立っていた。恐怖がイタリアの足を突き動かす。ズシンズシンと音をたてて迫って来る化物に、

「止まれよ！！」

もう、あと一步で門から出られると言う所で止まって制止をかける。ここから出てしまえば化物は追って来れない、何故かそう確信を持つ事が出来た。

「ここを越えれば俺は屋敷から出られる。そうしたらここにはもう人は来ない。だって俺と<sup>イタリア</sup>言う国が生き残ったんだから。だから……、お前の負けだよ」

化物は今にも門をくぐろうとするイタリアをじっと、ただ見つめ続ける。

「ねえ、何かそれって悔しくない？こんな足だけ取り柄の奴に負けて」

先程の行き場のない感情が瞬時にこの灰色の化物への怒りに変換される。日本を、ドイツを、そして皆を殺したコイツを絶対に許さない。

「……戻せよ。こんな歪んだ空間だったら戻せるだろ？そうしたらお前、一番に俺の事を食べにくれれば？勿論、お前が俺の足に敵えばの話だけどね」

両手を広げてさあと促す。我ながら馬鹿な、狂った事を言うものだと思う。でも……、それでも皆を取り戻したかった。

「戻せよ！……！」

強い口調で怒鳴る様に言う。それに反応する様に灰色の化物がおおおおお……と鳴き声をあげる。その瞬間、イタリアの持つ本が眩い光を放った。

「……でき、皆でその屋敷に行ってみないかい？」

化物と本によって時は屋敷に行く前の時間に巻き戻された。隣には

屋敷に入った当初に死んだ日本と少し前に死んだドイツが。生きてる……、皆、皆生きてる。それだけで涙が出そうになった。真っ白なピアノ、真っ白なカーペット、真っ白なベット、真っ白な床。ここは全てが赤に染まった世界ではない。

「ん？どうかしたのかイタリア。涙何か浮かべて？」

不思議そうにドイツが覗き込む。

「何か目に入りましたか？」

そつとハンカチを差し出してくれる日本。ドイツと日本の優しく、氣遣った問いかけ。あの世界ではもうとつくの昔に失われていたもの。それが今はここにある。腕に抱えた日記を悲壮な決意と共に強く握む。絶対に全員救ってみせる……。

この時のイタリアはこれからの時間を巻き戻し続ける悲劇の未来をまだ知らなかった。その悲劇への悲しみは二人の人間へと流れる事になる。一人は己の半身。<sup>ロマーノ</sup>もう一人は一昔前に失われた国。時代を越えてその声は彼の<sup>メッセージ</sup>人へと届く。そして今日もイタリアの巻き返しの日々は続く。



そして、そんな彼に仲間の救いの手が差し出されるのはもっと後の世界になる。

## 01：始まりはここからだった （後書き）

はい。宮原です。

今回はニコニコ動画で見たヘタ鬼を書かせていただきました。

宮原は物凄く（年単位で）流行遅れな人なのでヘタ鬼はつい最近まで全く知りませんでした。

掲示板とかツイッターで感動すると聞いて始めて見てみるか、となつたくらいです。

ヘタ鬼ファンの方々、実にすみません、はい。

そして所々模造及び変わっている所がちらほら（たぶん）あると思います。

何しろ一回しか見てないので……とか言い訳してみます。

その辺りは題名にあるAnother story（もう一つの物語）としてお楽しみいただけたら幸いです。

さあ、宮原の長い後書きもここまでです。

長々とお付き合いいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1596z/>

---

ヘタ鬼 Another storys

2011年12月5日20時10分発行